

# 『三国志演義』における日本語の翻訳

—小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』を中心に—

梁 蘊 嫻

## (一) はじめに

中国の歴史小説『三国志演義』は江戸時代に日本へ伝わってきたが、最初の日本語訳は『通俗三国志』（湖南文山序、元禄2〈1689〉年）であった。刊行から明治時代までの二百年間、それに匹敵する翻訳はまったくなく、まさに『通俗三国志』の独擅場であった。明治45年に、ようやく『通俗三国志』と異なった新しい訳・久保天随『新訳演義三国志』（1912年）が出版されたものの、反響はそれほど大きくなかった。戦後、小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』（1953-1973年）が世に出たが、最終巻が発行された翌年の1974年には第1巻がすでに25刷まで出たほど人気であった。小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』が三国志ブームに火をつけたかのように、後に数多くの訳本が次から次へと刊行されていた。たとえば、立間祥介『三国志演義』（1958年）、村上知行『完訳三国志』（1972-1973年）、安能務『三国演義』（1998-1999年）、井波律子『三国志演義』（2002-2003年）などがある。

『三国志演義』は今なお日本人に愛読されているが、日中両国の読者がこの小説に惹かれたところは果たして同じであろうか。この小説ではもっとも重要な概念は「義」であるが、日本人はそれをどのように理解しているのだろうか。この問題を考えるために、その日本語訳を検討することが手がかりの一つである。どの文化もそれぞれの独特な思想概念を持っているが、それをどのように異文化の言葉に置き換えるのかは、興味深い問題である。筆者は博士論文では『通俗三国志』における翻訳について論じたが、本論文では、小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』を取り上げることとしたい。小川環樹・金田純一郎の翻訳を分析することによって、異文化の思想概念の翻訳について考えたい。

## (二) 底本について

翻訳を検討する前に、まず底本について確認しておこう。小川環樹自身の解説

によると、本書は毛宗崗本を主要な底本とした上、ところどころ弘治本を参照している<sup>1</sup>。以下、底本の利用の二例をあげることによって、その翻訳の様相を明らかにする。

### (1) 弘治本との関係

小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』第二回では次の内容が書かれている。

董太后は地方の官吏と結託し、利益を貪っている、朝廷に出て政事にあずかるのはよろしくない、河間郡に送って監視させるべきで、日を定めて都から下るようにというのである<sup>2</sup>。

傍線部は毛宗崗本と対照させてみると、

何進出，召三公共議：來早設朝，使廷臣奏董太后原係藩妃，不宜久居宮中，合仍遷於河間安置，限日下即出國門<sup>3</sup>。

両者の内容が異なっていることがわかる。一方、弘治本を見てみると、

朝廷臣奏孝仁董太后。交通州郡。辜較財利。不宜臨朝聽政。合遷於河間安置<sup>4</sup>。

小川環樹訳に一致している内容があった。董太后は解濟亭侯劉<sup>かいとくていこうりゅうちよう</sup> 萇の妃であり、皇后になったことがないにもかかわらず、皇太后になったのである。このことは朝廷では前例がないため、不都合と思われていた。そのため、藩妃は宮中に長くいるのにふさわしくないという文脈があったわけである。小川環樹はおそらく「藩妃」の意味が取れなかったため、弘治本を取り入れたと考えられる。

### (2) 久保天随訳との関係

小川環樹は毛宗崗本と弘治本を底本としているが、先行していた久保天随による『新訳演義三国志』も参照していたと考えられる。その証拠は以下にあげておこう。第一回には劉備の身の上について紹介する箇所があるが、原作には次のように書かれている。

姓劉，名備，字玄德。昔劉勝之子劉貞，漢武時封涿鹿亭侯，後坐酬金失侯，因此遺這一枝在涿縣<sup>5</sup>。

傍線部「後坐酬金失侯」とはいかなる意味なのか、『史記集解』（卷三十・平準書第八）の解釈に基づいて考えてみよう。

集解如淳曰：「漢儀注王子為侯，侯歲以戶口酎黃金於漢廟，皇帝臨受獻金以助祭。大祀日飲酎，飲酎受金。金少不如斤兩，色惡，王削縣，侯免國」。

『史記集解』の説明によると、皇帝に献上する黄金は重さが足りなかったり、色が悪かったりすると、罰せられることがあるという。この箇所は、小川環樹訳では次のようになっている。

姓は劉、名は備、あざなは玄德。そのむかし劉勝の子劉貞は、漢の武帝のとき涿鹿亭侯に封ぜられたが、のち賂を取った事件に連座して知行を召し上げられ、このため涿県にこの一すじの家がのこったのであった<sup>6</sup>。

「坐酬金失侯」は、小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』では、「のち賂を取った事件に連座して知行を召し上げられ」と訳されている。「献上する黄金の量と質が悪かった」という意味が「賄賂を取った」と間違えられたのである。さらに注目したいのは、下記、久保天随『新訳演義三国志』の翻訳である。

姓は劉、名は備、字は玄德といへり。むかし、劉勝の子劉貞といふもの、漢の武帝の時、涿鹿亭侯に封ぜられしが、酬金に坐して、封土を召し上げられ、因つて、この一枝の子孫を涿県に残せしなりとぞ<sup>7</sup>。

久保天随の訳「酬金に坐して」は漢文訓読の方法であり、原文の意味が明確に訳されていない。「封土を召し上げられ」の訳は小川環樹の訳「知行を召し上げられ」との言葉の類似性が認められよう。小川環樹は先行作品としての久保訳を参照したのではないかと考えられる。

これまで検討してきたことから、小川環樹は文脈が判断できないとき、異なった底本もしくは先行した翻訳を参照したことがあることが明らかになった。

### (三) 義気の訳について

『三国志演義』では、もっとも読者に人気のある人物として、義に厚い関羽が

挙げられるだろう。中華文化圏では、関羽の性格を一言で説明せよと言われれば、「義気」と答える人が多いであろう。

「義気」とは何であろうか。『三国志演義』では「義」という言葉がよく出てくるが、「義」の意味は場合によって異なってくる。また、「義」は複合詞として、たとえば「信義」「仁義」「礼儀」「道義」「忠義」「大義」「義気」などのように、使われることが多い。『三国志演義』は端的に言えば、「忠義」「義気」の葛藤を描写した小説である。「忠義」は、君主の善し悪しに関わらず、臣下が無条件に仕えることである。「義気」は平等な信頼関係であり、絶対的な上下関係・「忠義」と異なったものである。劉備らの義兄弟の関係が義気の典型であり、それは「同年同月同日に死ぬ」という義兄弟の契りを結んだことに見られる私的結束力である。この「義気」は仲間だけではなく、敵同士にも適用されうる。主君の命令に反しても、尊敬できる敵には心を許し、「内面の主観的道德」としての「義気」が発動することがある。こうした「義気」は中国の特有な道德文化思想であり、日本人になじみの薄い言葉である。小川環樹は「義気」をどのように理解し、またどのように訳しているのだろうか。ここでは、湖南文山訳『通俗三国志』と比較することによって、小川環樹の翻訳の特徴を浮き彫りにしたい。以下三つの場面を取り上げて見てゆきたい。

#### (1) 兄弟のちぎり

第三回、董卓が呂布に丁原への寝返りを図るくだりには、義気という言葉が出てくる。あらすじは以下のとおりである。

董卓が呂布を養子にしたいので、呂布の同郷である李肅に金銀財宝を彼のところへ持参させる。李肅が呂布に対して「賢弟別來無恙！」（弟よ、あの後どうだったか）と挨拶し、金銀財宝及び赤兔馬を与えると、「兄賜此良駒，將何以為報」（このような名馬をいただけるなんて兄上に何をもってお返しすることができようか）と呂布は答える。これに対して、肅曰く「某為義氣而來，豈望報乎」<sup>8</sup>。

傍線部の翻訳はそれぞれ以下のとおりである。

湖南文山訳：「李肅申しけるは、某義の為に来る」<sup>9</sup>

久保天随訳：「某、た義氣の為に來りしに」<sup>10</sup>

小川環樹訳：李肅は「それがしは、兄弟のちぎりを思えばこそ、ここへ來

ただ、返しなどは望みじゃない」と言う<sup>11</sup>。

湖南文山は「義」と訳しているが、その意味が広すぎるため、文脈が曖昧になってしまっているといわざるを得ない。久保天随は「義氣」を訳さずに、そのまま引用するのみであった。先行した翻訳に対して、小川環樹は「義氣」を「兄弟のちぎり」と訳したのである。義兄弟については小川環樹は次のように述べたことがある。

この小説に包まれている庶民の精神についての今一つの例証をつけ加えるならば、この物語が、玄德・関羽・張飛の三人が、ただの君臣ではなくて義兄弟のちぎりをむすぶことから始まることである。この三人が特別に親密な関係にあったことは事実ではあるが、しかし義兄弟になったことは、正史に見えぬところで、後世に発生した伝説にちがいない。やはり元の時代の作ではないかと考えられる『五代史平話』の中に出てくる、宋に先立つ五代の各王朝の君主が義兄弟をもつ話の多いのから見ても、このころには誰も怪しまなくなっていたであろう。実際の五代の君主が義子をもったりすることは、それまでにない新しい社会的事実であった。それは家柄を重んじ、同姓女子を妻とせぬ反面に異姓の子を養わぬことが道徳的規範として堅く守られていた貴族制度の時代には、思いもよらぬことであつたらう。それはいかにも庶民らしい習慣である。そして君臣の節義を血をすすりあつた義兄弟の義理でおきかえた『三国志』の物語は、たしかに庶民のために書かれたといつても誤りではあるまい<sup>12</sup>。

上記から、小川環樹が中国における義兄弟の風習について調べていたことがわかる。李肅と呂布のやり取りのように、中国では同郷ということ、親しみを感じて、互いに「兄弟」と呼び合うことが多い。彼はこうした中国の文化風習をよく理解しているため、前後の文脈を吟味した上で「兄弟のちぎり」と訳したのである。

## (2) 義理

第二十四回から第二十八回までのくだりは、関羽が曹操軍に投降し、再び劉備のもとへ戻るといふ話である。この場面でも「義氣」という言葉が出てくる。あらずじを簡単に述べておく。

下邳城を守っている関羽は曹操軍に囲まれている。曹操は関羽の武芸や才能に憧れて彼を臣下にしようとするが、曹操の部下郭嘉は、「雲長義気深厚、必不肯降」（関羽は義気が深い人だから、決して投降しないだろう）と言う。続く場面では、曹操軍に囲まれた関羽が投降を説得されるが、私は忠義によって死ぬと言って断る。これに対して曹操の部下張遼は、降伏しないと三つの罪を問われると指摘する。関羽は張遼の言葉に納得して投降した。その後、劉備の行方が判明したため、関羽は曹操のもとから去ろうとする。曹操の部下が関羽をとどめようとする、曹操は故主に帰らせて、その義を全うさせると言って、関羽を手放すことにした。関羽は曹操が設けたさまざまな難関を突破し、最後には無事に劉備らと再会することができた。

傍線部についてそれぞれの翻訳は以下のとおりである。

湖南文山訳：忠義の志、気きはめてふかき者なれば<sup>13</sup>。

久保天随訳：雲長は義気深重なれば、必ず降参を肯せざるべく<sup>14</sup>。

小川環樹訳：かれは義理を重んずるものゆえ、けっして降参はいたしませんまい<sup>15</sup>。

湖南文山訳では、傍線部「雲長義気深厚、必不肯降」を「忠義ノ志、キハメテ深キ者」と訳されているが、これは関羽の性質に反するものではない。ただし、関羽が「忠義」よりも兄弟のちぎりを優先させるという「義気」が反映されていない。つまり、湖南文山訳は、「義」を「忠義」と訳すことで、主従関係にある一方、兄弟の情を持っている劉備と関羽との関係を映し出せず、単純な主従関係にしてしまったのである。これに対して、小川環樹は「義気」を「義理」と訳している。この訳語の注釈として、次の説明が載せられている。

義理一原文は「義気」である。この語は甚だ訳しにくい、この『小説三国演義』と同時代にできた『水滸伝』などに見えるところでは、血縁などの関係をはなれた人間同士の裸の結びつき、そのあいだに生ずる道德観念である。関羽がここで重んじているのも、玄德とたてた義兄弟の誓への信義であるらしい<sup>16</sup>。

「義気」にふさわしい訳語はないが、あえて訳すとすれば、「義理」という言葉を選んだという小川環樹の弁明である。ところで、興味深いのは以下の小川の発言である。

かれ自身この約束をかたく守り、曹操が何とかして自分の部下につけたいと、さまざまな誘惑を試みるのをしりぞけて、玄德への忠節を全うし、しかし曹操のために、顔良、文醜二人の敵の強将を切りすてて功を立て、この功をもって恩に報いたとし、玄德が袁紹のもとに身をよせていると聞かや、その日のうちに、曹操からのおくり物はすべて返して出立し、無事に兄よめたちを玄德のところに送り届けるのである。以上が「千里独行」のあらすじであるが、関羽の何ものにも屈しない意志の強さと同時に、かれがその忠節を貫くためにはらう行き届いた注意の細心さがえがかれていることが読者を感歎させる。

小川環樹は「義気」を「忠義」と混同してはいないものの、もっとも惹かれたのはやはり忠節をつくす関羽の姿である。中華文化圏では関羽が万難を排して劉備のもとへ戻ったのは「義気」から生じた行動だと考えられているが、日本では忠節がこの小説の主眼だと理解されているようである。小川環樹は多くの日本人と同様に、君臣関係を重んずるが、その考えは以下の場面で確認できる。

張遼は何としてもかれを引き止めることはできぬと分ったので、やがて別れを告げたが、ひそかに思案するには「もしこのとおりを主君に報告すれば、関羽の命が危ういことになろう。が、もし事実を曲げて報告すれば、それは君に仕える道にそむくものだ」と考えあぐんだ末、大息をつき「曹操どのは君であり父だ。関羽は兄弟の間柄にすぎぬ。兄弟の誼で、君や父をあざむくのは、不忠にちがいない。たとえ不義にはなろうとも、不忠であってはならぬ」と決心すると、ついに曹操の前に出て、ありのままに報告し「雲長は、劉備とは生死にかかわらず運命を共にしようといたしておりますゆえ、どうしても引き止められますまい」と言った。曹操も溜息をつき「主をかえても本をわすれぬのは、天下の義士じゃ」<sup>17</sup>。

小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』は毛宗崗本を底本としているが、場合によって弘治本を参照している。上記の箇所は毛宗崗本では削除されているが、

小川環樹が弘治本を参照して付け加えたものである。毛本と比べて、弘治本はより君臣関係を重視しているということもいえる。つまり、「忠義」が重要視されているのである。小川は次のようなことを述べている。

『演義』の序文における「勸善懲悪」ということばも明らかに儒教のものであり、その具体的な内容は忠義である。すなわち忠義を勤め、不忠を懲らすことが、この小説の眼目となる<sup>18</sup>。

このことから、小川環樹が弘治本を参照したのは、主君に忠節をつくすという特徴に着眼したからだと推測されよう。このようにみえてくると、小川環樹は「義気」の本義を理解しているが、それよりも「忠義」が見どころであるという考えを持っていることが明らかになった。

### (3) おとこ気

前述したように、「義気」は兄弟間のみで使われるわけではない。敵同士の間でも適用される。第五十三回「黄忠魏延献長沙」を見てみよう。

長沙郡を攻め落とすように命じられた関羽は、長沙郡の名将・黄忠と決闘することになるが、勝負がつかない。突然馬の足並みが乱れて黄忠は落馬するが、関羽はあえて彼を殺さない。黄忠は「難得雲長如此義気、我本死的人、他不忍殺害」と言って、その恩返しとして、黄忠は関羽に矢を的かさせないようにする。

関羽が劣勢になった黄忠を殺さなかったのは、敵と平等な条件下で戦いたかったからである。また、黄忠が関羽を逃したのは、その恩義に報いるためである。このようなやり取りが「義気」に基づく行為である。さて、傍線部の翻訳について見てみよう。

湖南文山訳：われ今日すでに討つべかりしを、関羽情ありて、幸ニ放したり<sup>19</sup>。

久保天随訳：雲長、かくの如く義気ありて、我を殺すに忍びずと覚ゆるに、われ又何ぞ彼を射るに忍びむや<sup>20</sup>

小川環樹訳：黄忠が心中に思いめぐらすには、関羽のようなおとこ気のある



ものは珍しい<sup>21</sup>。

湖南文山訳は、「義気」を「情」に置き換えているが、久保天随訳はそのまま「義気」を使う。このくだりは、『保元物語』陽明文庫本の「白河殿攻め落す事」から影響を受けたものであり、「情」が五回も使われている。湖南文山訳は「義気」と「情」には本来討つべき敵の命を惜しむという共通性があることを勘案し、さらに日本人にとって分かりやすい文脈にするために、漢語の「義気」を和語の「情」と訳すように工夫している。ところで、漢語の「義」と和語の「情」には共通性があるとはいえ、意味は完全に一致しているわけではない。そのため、「義」が「情」に置き換えられると、意味のずれが生じる場合もある。「情」は「哀れ」「慈悲」とともに表れることが多い。たとえば、『保元物語』下巻「義朝幼少の弟悉く失はるる事」には「箭取りと申し候ふは、殊に情けも深く、哀れをも知りて、助くべき者をば助け、罰すべき者をも許したまへばこそ、弓箭の冥加もありて、家門繁昌する慣らひにて候ふに」とあるように、武士は「情」深いこと以外にも、哀れを知ること、そして助けるべき者を助け、罰すべき者を許すという寛容な心も要求される。以上の武士としての規範を守るならば、神仏の助力が加わり、一家の繁栄も期されるというのである。このように「情」には「哀れ」「慈悲心」という意味合いが含まれているため、「義気」が「情」に変えられたことによって、悲しい雰囲気が漂っているのである<sup>22</sup>。

これに対して、小川環樹は「義気」を「おとこ気」と訳している。『日本国語大辞典』第2版（小学館、2003年）の「おとこ気」の項目では、「男らしい気性。義侠（ぎきょう）心に富んだ気性」とあり、『デジタル大辞泉』では、「弱い者が苦しんでいるのを見のがせない気性」とある。この「弱い者が苦しんでいるのを見のがせない気性」は「義気」の性質に通じるところがある。

このように見てくると、「おとこ気」と「情」は両者とも「義気」に重なり合ったところがあると言ってよい。ただし、両者それぞれの性質に異なった部分もある。それは一言で言えば、前者が「ますらおぶり」であり、後者が「たおやめぶり」なのである。小川環樹は「おとこ気」と訳すことによって、関羽の男らしい気性を全面的に出しているのである。小川環樹は若い頃『通俗三国志』を精読していたのだが、ここから、『通俗三国志』と異なった訳本を作り直そうとする意気込みが見られる。ところで、田中尚子氏が指摘しているように、湖南文山が原作を敗者・滅亡の文学へと作り替えたのであるが<sup>23</sup>、小川環樹の翻訳はより勝者・陽気の文学としての『三国志演義』の気質に近づけようとしたとあってよい

だろう。

#### (四) 「仁」と「徳」の翻訳

##### (1) 「仁」から「情」へ

小川環樹訳では「義」が「情」と訳されていないのだが、「仁」が「情」と訳された例はしばしば見られる。

たとえば、小説の第三回、呂布が義父の丁原を裏切って、「丁原不仁」ということを口実に、彼を殺してしまった場面である。各訳本の翻訳は以下のである。

湖南文山訳：丁原<sup>不仁</sup>不仁なりしゆへ<sup>24</sup>

久保天随訳：丁原<sup>不仁</sup>不仁なりし故<sup>25</sup>

小川環樹訳：「ものども、丁原は<sup>情のない</sup>やつゆえ、ぶち殺したぞ」<sup>26</sup>

「不仁」の先行訳に対して、小川環樹は「情のない」と訳している。これにとどまらず、第五回、曹操が陳宮に見捨てられた理由を自分の「不仁」だと考えた場面も同様である。

湖南文山訳：「我が<sup>不義</sup>を疾んですでたるならんとて」<sup>27</sup>

久保天随訳：「わが<sup>不仁</sup>なるを疑うて棄てたるならむ」<sup>28</sup>

小川環樹訳：おれのことを<sup>仁（なさけ）に欠けたもの</sup>だと疑いをもち、それでおれを捨てて行ったのだろう<sup>29</sup>。

小川環樹は「仁」という漢字を「なさけ」と読ませている。儒教思想の色彩を薄めることによって、日本人の読者になじませようとしていると考えられる。

##### (2) 「徳」から「情」へ

諸葛孔明が南蛮を征討する話（第八十七回～第九十回）すなわち、七たび蛮人の孟獲を捕らえ、七たび放つという有名な話である。このくだりには「徳」が「情」に訳される例が多く見られる。あらすじを見てみよう。

孔明は蛮人の鄂煥を捕えたが、鄂煥の上司・高定が忠義の人であるという理由で①彼を釈放した。そこで鄂煥は②孔明の徳を称え（説孔明之徳）、高定

は③「孔明が義によって釈放してくれた」(諸葛亮以義放之)と仲間に説明している。その後も、孔明は南蛮の兵士を捕えては解放することを繰り返す。釈放された兵士はみな孔明に恩を感じ、④その徳を説いて(言説孔明之徳)帰順しようとした。また、高定は孔明に恩を感じ、服従しない雍闓の首を取って献上する。もちろん、蛮人の中には、董荼奴のように、孔明の恩に報いず再び反乱を起こした者もいる。そこで、孔明の部下馬岱は、董荼奴に対して「義がなく恩に背く輩よ、丞相はおまえの命を見逃してやったのに、今日また反乱を起こすなど自ら恥ずかしくないのか」(無義背恩之徒、吾丞相饒汝性命、今又背反、豈不自羞)と叱責する。董荼奴はそれを聞くと、恥じ入り退散した。このことを知った⑤蛮人の首領・孟獲は「おまえらは孔明の恩を受けたから、戦わずして退いたのであろう」(吾自知汝原受諸葛亮之恩、今故不戦而退)と怒り狂うが、董荼奴は「孔明には命を助けてもらった恩があるから、それに報うほどのものはない」(孔明更有活我等性命之恩、無可為報)と答える。三度目、蛮人の首領・孟獲を捉えるとき、孔明は諸大将を集めて⑥「捉えて殺さないのは、心を服させようとしたからだ」(吾三番擒之而不殺、誠欲服其心)と言う。孟獲が簡単に降伏しないので、孔明は「吾以仁義待之、如何不服」と聞く。最終的に、孟獲は七回捉えられては放された結果、ついに降伏し、「某子子孫孫皆感覆載生成之恩、安得不服」と孔明に感謝するのである。

このくだりは、「仁」「徳」「仁義」「礼義」などの言葉が頻出しており、蛮族を教化しようとする儒教の政治観が濃厚に表れている部分だと言ってよい。また、これは孔明が仁義をもって南蛮の人を感化し、恩恵を施して、帰順させることに成功した話である。さて、各翻訳は下記に整理しておく。

①

湖南文山訳：孔明きうにその縄を解免し、酒肉をあたへて、持成ければ、鄂がく煥、深くその恩を感ず<sup>30</sup>。

久保天随訳：孔明、その縛めを解かしめ、酒食を与へて、これを款待し、汝は何人の手に属するぞと問へば、鄂煥答へて、某は高定の部将なりといふ<sup>31</sup>。

金田純一郎訳：孔明はその縛めをとかせ、酒食のもてなしをしたので、鄂煥は情に感じた<sup>32</sup>。

②

湖南文山訳：鄂煥ふかく恩を謝して、わが陣に回り、高定に見て、**孔明が徳をかたり**、共に感嘆して、居たる所に<sup>33</sup>。

久保天随訳：鄂煥、拝謝して去り、高定に見えて、**孔明の徳を語りしかば**、高定も亦た感激して已まず<sup>34</sup>。

金田純一郎訳：鄂煥は平伏して礼をのべ、高定のもとに帰ると、**孔明の厚い情をのべた**ので、高定もいたく感じ入った<sup>35</sup>。

③

湖南文山訳：高定答て曰く、**孔明情ありて**、放し出せり、ようがい雍闓が曰く、御辺これを、しらずや。これは孔明が反間の計にて、御辺と、我とを、不和にせん為なり<sup>36</sup>。

久保天随訳：高定答へて、諸葛亮、**義を以て**之を放ちぬといふ。雍闓かさねて、こは諸葛亮が反間の計にして、われ等兩人を不和ならしめむとし、因つて、この謀を施せしなりといふに<sup>37</sup>。

金田純一郎訳：高定が「**諸葛亮が義によって**許してくれたと申します」と答えると、雍闓「これは諸葛亮の離間の計略に相違ない。われら兩人を不和にせんとて、かように計らったものであろう」<sup>38</sup>。

④

湖南文山訳：高定心疑ひ、密に雍闓が陣へ、人を遣して、その体を伺はしむるに、蜀の陣より、放されて、回りたる、士卒どもと、おぼしくて、相集りて、**孔明が徳を感称し**、われ等高定が、手のものなりと詐らずんば<sup>39</sup>。

久保天随訳：高定、ひそかに人を雍闓の陣に遣して、模様を探らしむるに、放たれて回り来りし其半の者は、**孔明の徳を称し**、従つて、手勢には、高定に帰順せむと思ふもの少なからず<sup>40</sup>。

金田純一郎訳：そこで高定はひそかに雍闓の陣中へ人をやって探らせてみたところ、許されて帰って来た兵士たちが一様に**孔明の情の厚さをほめそやし**、雍闓の部下たちも高定の方に付こうとの心を起した様子である<sup>41</sup>。

⑤

湖南文山訳：孟獲怒つて曰く、われよく汝が陣を売るの、計ことをしる。汝さきに、**孔明が恩を受けたりしゆへ**、今戦はずして、退きたりとて、引き出して、斬しめんとするを<sup>42</sup>。

久保天随訳：孟獲、大に怒り、汝は曩に諸葛亮の恩を受けしに因り、今わざと戦はずして退きしならむ、こは陣を売るの計なりとて、引き出して斬らしめるとするを<sup>43</sup>。

金田純一郎訳：孟獲は腹を立て、「よくわかっておるぞ。きさまは諸葛亮の情をうけ、わざと戦いもせずに引き下がり、敵に陣を売りおったな」と、引き出して首をはねろと命じた<sup>44</sup>。

⑥

湖南文山訳：われすでに孟獲を生取ること、三が度にして、皆義をもつて放したり、これ元、恩をもつて、蛮夷の心をむすび、其自ら乱るゝを、待ん為なり<sup>45</sup>。

久保天随訳：われ三たび之を擒にしたるも、遂に殺さゞりしは、心から誠に服せしめ、その類を絶たざらむと思へばなり<sup>46</sup>。

金田純一郎訳：「これまで三たび孟獲を生け捕ったが、いずれも義によって許しておいた。これはまず情をかけて敵の心を乱さんためである」<sup>47</sup>。

上記の翻訳を見比べれば、金田純一郎が「徳」「恩」を「情」と訳す傾向があることがわかる。このことから、「情は人の為ならず」という日本の諺が思い出される。この言葉は日本の軍記物語にしばしば見受けられるが<sup>48</sup>、ここでは『太平記』『四条縄手合戦事付上山討死事』（二十六巻）を例としてその意味を検討してみよう。

上山一人が高師直の鎧を無断に身につけたので、師直の部下から鎧を外されそうとなっていた。しかし師直は、命がけで戦ってくれる人にはどんなに貴重な鎧を与えても惜しまないと言って上山を許した。上山は師直の言葉を聞いて「情」を感じ、彼のために討ち死をした。最後に地の文で「情は人のためならずとは斯様の事を申すべき」と書かれているように、「人に情をかけると、人の為ではなく、後に自分に報いがあるからだ」と結論付けている。ここには「情」と「恩返し」の構造が見出される。

蛮族に「徳」を施した漢民族の尊大もことごとく表されているこの箇所では、小川環樹は「徳」や「恩」を「情」に置き換えることによって、漢民族の傲慢を少しでも影に隠すことができたのであろう。

## (五) おわりに

小川環樹・金田純一郎の翻訳を湖南文山訳及び久保天随訳と比較してきた。湖南文山訳は軍記物語の影響が強く、日本人に馴染みやすい表現や言葉がよく使われている。久保天随訳は直訳を取ることが多い。これらに対して、小川環樹・金田純一郎の翻訳は、湖南文山訳と久保天随訳の両者の折衷で、「義気」の中国の独特な文化を表現しようとしている一方、儒教思想に関する言葉を日本人に理解しやすい言葉で訳すように努めている。わかりやすい翻訳は近代における『三国演義』の普及に大きな役割を果たしたといえよう。

## 注

- 1 「毛本はわたくしの翻訳の底本に用いたものであり、上にのべたごとく『三国演義』の最終の形をあらわすものであるから、その製作について、やや詳しくふれておきたい。が、わたくしが現在利用できるのは、弘治本の影印本と毛本（それも初刊本でない）とにすぎないため、諸家の研究のほかあまり多くを附加しえないのは残念である。」（小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』1、岩波文庫、1998年改版第1刷）327頁。
- 2 小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』1-8（岩波文庫、1998年改版第1刷）第1巻52頁。以下の引用はすべてこのテキストによる。
- 3 饒彬校訂『三国演義』（毛宗崗批、三民書局、初版、1971年）13頁。小川環樹の翻訳は毛宗崗本を底本にしているため、本稿の引用は基本的にこのテキストによる。
- 4 『明弘治版三国志通俗演義』（巳巳中秋上海涵芬楼攄明弘治本景印、新文豊出版、1979年）30頁。
- 5 前掲書、三民書局、2-3頁。
- 6 前掲書、岩波文庫、第1巻12頁。
- 7 久保天随『新訳演義三国志』（新訳漢文叢書12-13、至誠堂、1912年）上巻6頁。久保天随訳の引用は全てこのテキストによる。
- 8 前掲書三民書局、19頁。
- 9 三浦理編(1912)『通俗三国志』（上中下 有朋堂文庫 有朋堂書店）上巻76頁。
- 10 前掲書、至誠堂、上巻56頁。
- 11 前掲書、岩波文庫、第1巻74頁。
- 12 前掲書、岩波文庫、第1巻342頁。
- 13 前掲書、博文館、上巻437頁。
- 14 前掲書、至誠堂、上巻442頁。
- 15 前掲書、岩波文庫、第2巻258頁。
- 16 前掲書、岩波文庫、第2巻376頁。
- 17 傍線部の原文は以下のとおりである。「自思曰若以實告曹公、恐傷雲長性命、若不實告又恐非事君之道、喟然曰曹公君父也。雲長兄弟也。以兄弟之情而瞞君父此不忠也。寧居不義、不可不忠。遂入實告」。

- 18 小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』（岩波文庫、1998年改版第1刷）第1巻331頁。
- 19 前掲書、博文館、上巻892頁。
- 20 前掲書、至誠堂、上巻888頁。
- 21 前掲書、岩波文庫、第4巻143頁。
- 22 詳細は梁蘊嫻「江戸時代における『三国志演義』の受容―「義」概念及び挿絵を中心に―」（東京大学大学院総合文化研究科博士論文、2010年）を参照されたい。
- 23 「軍記物語を下敷きとすることによって、昂揚の文学であった『三国志演義』を（もちろんその要素を完全に捨象したわけではないが）、滅びへと向う国々や英雄達を描き込む、敗者・滅亡の文学、『通俗三国志』へと作り替えた結果、身近に感じられる世界観を持った作品となり、そこから多くの読者を獲得していったと思われる」。（田中尚子『三国志享受史論考』、汲古書院、2007年）209頁。
- 24 前掲書、博文館、上巻77頁。
- 25 前掲書、至誠堂、上巻58頁。
- 26 前掲書、岩波文庫、第1巻76頁。
- 27 前掲書、博文館、上巻29頁。
- 28 前掲書、至誠堂、上巻76頁。
- 29 前掲書、岩波文庫、第1巻98頁。
- 30 前掲書、博文館、下巻370頁。
- 31 前掲書、至誠堂、下巻411頁。
- 32 前掲書、岩波文庫、第6巻236頁。
- 33 前掲書、博文館、下巻370頁。
- 34 前掲書、至誠堂、下巻411頁。
- 35 前掲書、岩波文庫、第6巻236頁。
- 36 前掲書、博文館、下巻371頁。
- 37 前掲書、至誠堂、下巻412頁。
- 38 前掲書、岩波文庫、第6巻236頁。
- 39 前掲書、博文館、下巻372頁。
- 40 前掲書、至誠堂、下巻412頁。
- 41 前掲書、岩波文庫、第6巻238頁。
- 42 前掲書、博文館、下巻389頁。
- 43 前掲書、至誠堂、下巻431頁。
- 44 前掲書、岩波文庫、第6巻260頁。
- 45 前掲書、博文館、下巻396頁。
- 46 前掲書、至誠堂、下巻439頁。
- 47 前掲書、岩波文庫、第6巻268頁。
- 48 『平治物語』にも、情をかけると報われるという事例が見られる。

【テキスト】

饒彬校訂『三国演義』（毛宗崗批、三民書局、初版、1971年）

小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』1-8（岩波文庫、1998年改版第1刷）

『明弘治版三国志通俗演義』（巳巳中秋上海涵芬楼摺明弘治本景印、新文豊出版、1979年）

久保天随『新訳演義三国志』上下（新訳漢文叢書12-13、至誠堂、1912年）

徳田武『李卓吾先生批評 三国志』1-6（対訳中国歴小説選集、ゆまに書房、1984年）